

## 西夏文字の世界

佐藤久美：文学部の学生。歴史一般に関心がある。

山村健一：情報科学部の学生。入門段階のいろいろな言葉の学習を趣味としている。

安井教授：漢文の先生。いろいろな文字に関心がある。

\*\*\* 安井の研究室で、毎週 1 回、いろいろな文字資料の勉強会を開いている \*\*\*

- 第 1 回 背景
- 第 2 回 解読への道のり
- 第 3 回 字典の利用
- 第 4 回 資料を読む

### 第 1 回 《背景》

安井教授：まずこれを見てください。これは西夏文字が鑄込まれた西夏国の貨幣です。  
上→右→下→左の順に読むようになっていまして、中国語に訳すと「貞観元宝」となります。



山村健一：文字の雰囲気はずいぶん漢字に似ていますね。

ところで、西夏文字は西夏国の文字だということは知っているのですが、西夏とはどのような国なののでしょうか？

安井教授：基本的なところは、先ずこれで確認してみましょう。高校の世界史の教科書（『三省堂 世界史[B]改訂版』）です。佐藤さん、関係箇所をまとめてください。

佐藤久美：はい。教科書によりますと、次の四点になります。

- 一、チベット系のタングート（党項）が吐蕃やウイグルを破り、11世紀前半に西夏国(1038-1227)を建てた。
- 二、漢字から発達した西夏文字を作った。
- 三、儒教や仏教が盛んであった。
- 四、1227年にモンゴルのチンギス=ハンに滅ぼされた。

安井教授：あっさりした記述ですが、しかたありませんね。

ここに12世紀初めの状況を示した地図があります。まずは、西夏国の位置を確認してください。



『中国歴史地図集 第六冊』（上海：地図出版社。  
1982年。譚其驤主編）により作成した模式図

西夏の国(1038-1227)は、中国の中心部から見ると西北になります。ちょうど東アジアと西アジアを結ぶ交通路の要所にあたっています。

山村健一：この地図を見ますと、北はモンゴル語系の遼、西はトルコ語系のウイグル、東は中国語の北宋、南はチベット語系の吐蕃（トバン）に接しています。この内、西夏の言葉は南に接するチベット語系の吐蕃の言葉と関係が深いということですね。

ところで西夏文字はいつ作られ、いつ頃まで使われたのでしょうか？

安井教授：佐藤さん、このあたりのこと、調べてあるようでしたらお願いします。

佐藤久美：はい。西夏文字は西夏語を表記するために、1036年、後に西夏国の王となる李元昊（リゲソウ）によって公布されました。西夏はその後、モンゴルのチンギス=ハンにより1227年に滅ぼされました。ですから、正式な国字としては190年余りに渡って使用されたこととなります。

もともと、西夏国が滅亡した後にも使用例があるようです。まず、元代の貨幣を挙げるができます。片面に漢字で至元通宝とあり、一方の面に西夏文字があるそうです。この実物は見たことがありません。先生のところにありますか？

安井教授：これのことですね。



オモテ



ウラ

オモテは上→下→右→左の順に読みます。上はパスパ文字、下は何の文字かわかりませんが、右はアラビア文字、それで左が西夏文字です。それぞれの文字で中国語の「至元通宝」の音を書き表わしています。下をパスパ文字の「治」と見なし、これを「至治通宝」とする読みが通行していますが賛成できません。ウラの「至元通宝」に拠るならば至元年間ということになります。至元は第5代世祖フビライの至元年間（1264～1294）と第14代順帝トゴン・テムルの至元年間（1335～1340）があります。おそらく後者でしょう。

佐藤さん、続けてください。

佐藤久美：はい。年代がわかるものもあります。北京の西北郊外の居庸関という所に、過街塔と呼ばれる建築物があります。その塔の下をくぐって北京より塞外に赴くことになるのですが、その塔の内壁に西夏文字の文が刻まれています。過街塔は元の至正五年（1345年）築です。西夏国は1032年に起こり1227年に

滅亡していますから、この文字は西夏国滅亡後も使用され続け、この時点まで三百年以上生き続けたということになります。

わたしが調べたところは以上ですが、これでよろしいでしょうか？



居庸関の過街塔

『13-14 世紀のモンゴル文書』（1895 年）。Prince R.N.Bonaparte(1895), *Documents de l'époque mongole des XIII<sup>e</sup> et XIV<sup>e</sup> siècles. Inscriptions en six langues de la porte de Kiu-yong Koan, près Pékin : lettres, s'èles et monnaies en écritures ouïgoure et 'Phags-pa dont les originaux ou les estampages existent en France* (Paris,1895)に掲載された写真。

安井教授：どうもありがとう。

これは、『西夏語比較研究』（李範文主編、寧夏人民出版社、1999 年 11 月出版、第 2 頁）という本に書いてあったことですが、ずっと降って明代のものもあるようです。宣徳五年(1430 年)と読める年号を持つ西夏文の佛教関係の残巻が発見されているようです。また 1962 年には、河北省保定の韓左から明の弘治五年(1502 年)の年号を持つ西夏文の石柱が出土しているとのこと。そうすると、明代の中期まで西夏文字が使用されていたということに

なりますね。

ですから、西夏文字は、1036年に公布されてから190年間に渡って国字として用いられ、西夏が滅んだ後も275年間は何らかの形で傳承され、合計すると460年余りに渡る使用の歴史を持つ文字ということになります。

**\*\*\*\*\*次回は次のページからです\*\*\*\*\***

## 第2回《解説への道のり》

佐藤久美：西夏文字の解説はどのように行われたのでしょうか？

安井教授：解説への道のりには三つの段階があります。

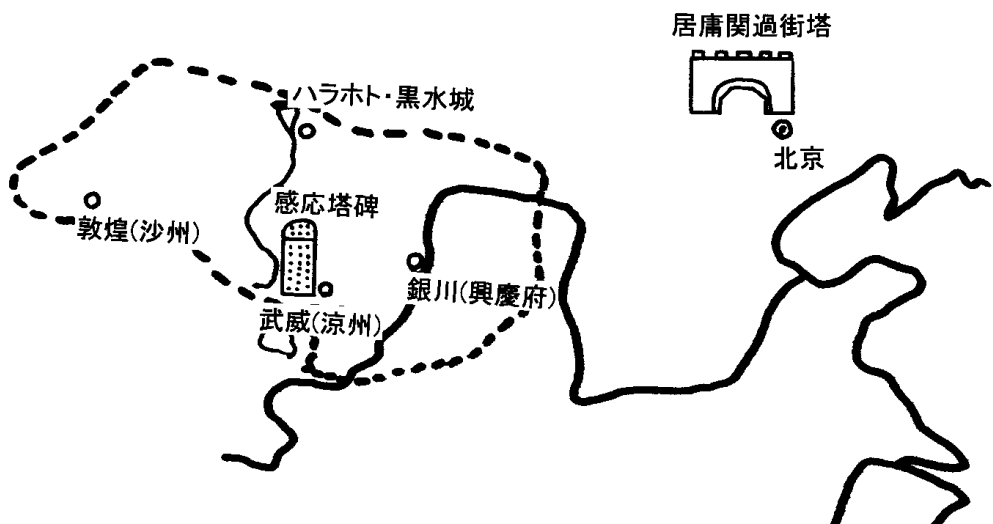
- 一、 先ず、資料が学会に紹介され文字への関心が喚起された段階。この段階では西夏文字は、正しくそれと認識されていない。
- 二、 次に、西夏国の文字であると正しく認識され、資料の位置づけがなされる段階。
- 三、 最後に、この文字の音と意味および文字の構造が明らかにされる段階。

山村健一：この内、重要なのは二と三の段階であろうと思うのですが、この画数の多い奇妙な文字を、西夏国の文字であると正しく認識したのはいつのことで、誰によってなされたのでしょうか？

安井教授：それは1804年、張澍(チョウジュ)という中国の方によるようです。張氏の著書に『養素堂文集』(道光十七年・1837年序)というものがあり、その巻十九の「書西夏天祐民安碑後」という一文には次のようにあります。

嘉慶甲子(1804)の年に涼州(今の甘肅省武威)城内清応寺の中で奇妙な文字が刻まれた碑石を発見した。一面は漢文で、他の一面に問題の文字が刻まれていた。漢文面によると、天祐民安五年(1094)に建立された西夏国の碑文である。これより問題の文字は西夏国の文字であることが分かった

こういったわけです。この碑文がいわゆる「涼州感応塔碑文」です。参考までに西夏の文物に関わる地図を出しました。碑文の場所を確認してください。



その他には、初尚齡という中国の方が『吉金所見録』（道光七年・1827年）という古銭を集めた本をだしました。その中に、西夏文字銭の模刻があり、「西夏梵字銭」とちゃんと書いてあります。この本の「卷之十三、第九頁」をみると「かつて涼州大雲寺を訪ね、古碑を得た。その碑の表は、正にこれ等の字に作っている。碑の裏は、漢字の楷書であった。何とかこれを読むと、天祐民安五年所立とある。これよりこの銭の文字が西夏の梵書であることが分かった」とあります。自分の目で碑文の文字と西夏銭の文字が同一であることをたしかめ、西夏文字銭を西夏文字による西夏国の貨幣であると正しく認識し公にしたこととなります。ですから、書物という体裁で西夏文字の存在を公にしたのは、初尚齡の『吉金所見録』が最初ということになります。もっとも、この時点では西夏文字自体の解読はなされていませんが、後の西夏文字の同定に少なからぬ影響を与えることになったようです。

### 〈意味の解読の端緒〉

山村健一：本格的な解読をしたのは誰だったのでしょうか？

安井教授：バッシュェルという方の論文を挙げるのが適切だと思います。

S.W.Bushell, 1895-1896 'HSI HSIA DYNASTY OF TANGUT, THEIR MONEY AND PECULIAR SCRIPT.' Journal of the North China Branch of the Royal Asiatic Society. Vol. X X X, 1895-1896.

バッシュェル氏は、西夏語と漢語を併記した涼州感応塔碑文中の37の西夏文字に漢語を引きあて、更にその結果を手持ちの二種の西夏文字銭に応用し、一つは正しく大安宝銭と読みました。残念ながら、他方の乾祐宝銭は解読には至りませんでした。参考のために解読できた大安宝銭と解読できなかった乾祐宝銭の二種を挙げます。これは拓本です。



大安宝銭



乾祐宝銭

バッシュェル氏の論文の中で注目すべきは、西夏語とチベット語との関係に言及したことです。

山村健一：「西夏語とチベット語との関係」とはどういうことでしょうか？

安井教授：感応塔碑文の西夏語の中に、名詞の後に形容詞を置き、後から前の名詞を修

飾している、という個所のあることを指摘しています。

山村健一：それはチベット語と同じ語順ですね。

安井教授：そうですね。バッシエル氏もそういったことを言っています。

西夏語研究の第一人者に西田龍雄という方がおられますが、『西夏王国の言語と文化』（岩波書店、1997年、p.351）のなかで、西夏文字の実質的な解読はバッシエル(1895)に始まったと指摘しています。ですから、バッシエル(1895)の研究は、西夏文字の研究史にとって重要な出来事であったわけです。もっともこれは、西夏文字が表わす意味は何か、という意味の研究の始まりです。

### 〈音の解明の端緒〉

山村健一：西夏文字がどの様に読まれたか、という音の研究の始まりはどこにあるのでしょうか？

安井教授：音の研究の端緒は、先に紹介した居庸関過街塔の碑文の研究にみることができます。

バッシエル(1895)と同年に『13-14世紀のモンゴル文書』（1895年）という影響力の大きな書物がヨーロッパで公刊されました。この本の中に、居庸関過街塔の壁面に刻された西夏文字の拓本が掲載されています。壁面の碑文には、西夏文字を用いて梵語の陀羅尼(ダラニ)の音を書き写した部分があります。ちょうど万葉仮名で日本語を書いたようなものです。ですからその陀羅尼の音がわかれば西夏文字のだいたいの音もわかるということになります。

この本では、次のように、陀羅尼の音をローマ字に直し、そのローマ字に西夏文字を引き当てています。ここに挙げた部分は、過街塔の東壁に刻された西夏文字陀羅尼の一行目です。

𐰽𐰺𐰍	sa	10
𐰽𐰺𐰎	rva	11
𐰽𐰺𐰏	ca	12
𐰽𐰺𐰐	ra	13
𐰽𐰺𐰑	ga	14

『13-14世紀のモンゴル文書』（1895年）による

梵語の sarva の sa に𐰽を、rva に𐰺をあてていることがわかります



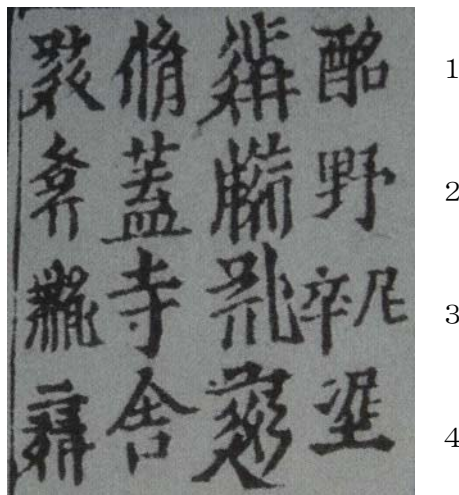
ね。もちろんこれは近似音にすぎないのですが、西夏文字の音を考察するヒントが一つ与えられたということで、貴重な資料となります。このように、初期に於いては二言語対照資料によって、個別の文字の意味と音を推察するしかなかったわけです。

### 〈解説の展開〉

安井教授：その後、1908年のことです。ロシアのコズロフ氏が率いる探検隊が、内蒙古の黒水城（ハラホト）の遺跡から西夏文字資料を発見しました。これで、西夏文字解読の研究は大きく進むことになりました。黒水城（ハラホト）の位置は、先の地図で確認してください。

多くの資料のうち、特に重要であったのは、『番漢合時掌中珠』（1190年）と『同音』（1132年）という書物です。まず『掌中珠』を見てみましょう。『掌中珠』は西夏語と中国語を対応させた語彙集です。その一部分を切り取ってみました。

b      B      A      a



『俄藏黒水城文献⑩』（上海古籍出版社、1999年）による

A は西夏語で、その右側の a は西夏語の音を漢字で示したものです。B は、西夏語 A に対応する中国語です。B の左側の b は、中国語の音を西夏文字で示したものです。

山村健一：これは理想的な対音と対訳の資料ですね。

B の中国語「修蓋寺舍」は「寺舎を建てる（修蓋）」と読めます。A の西夏語は一字一字中国語に対応しているのでしょうか？

安井教授：それを知るには、西夏語の字典に拠るのが近道でしょう。西夏語の字典に『夏漢字典』（李範文編著、中国社会科学出版社、1997年）というものがあります。書物の題の「夏」が西夏語で、「漢」がもちろん中国語です。6000

字の西夏文字を見出しとして、文字の発音、意味、用例を載せています。この辞典は様々な文字索引を兼備していて、なかなか便利です。それで、この辞典によりますと、

- A1 の𐽀(2291)は「寺」
- A2 の𐽁(2560)は「舍」
- A3 の𐽂(5411)は「修造する」
- A4 の𐽃(1147)も「修造する」

A1 と A2 の二字𐽀𐽁で「寺舍」という名詞。A3 と A4 は似通った意味の動詞で、二字𐽂𐽃で「修造する」となることがわかります。

山村健一：西夏文字の後にある（ ）の中の数字は何でしょうか？

安井教授：（ ）で括った数字は、字毎に振られた辞典の通し番号です。もう一度『夏漢辞典』に戻って文字の情報を確認する際に便利です。この番号を控えておくようにしましょう。

山村健一：そうしますと、A1A2 は「寺舍」で目的語、A3A4 は「修造する」という動詞ですから、語順は {目的語+動詞} ですね。対応する中国語は、「修蓋(修造する)+寺舍」で {動詞+目的語} ですから、西夏語と中国語とでは語順が逆になっています。単語だけでなく簡単な文法も分かりますね。

佐藤久美：それから、a は西夏文字の音を漢字音で示したもので、b は漢字の音を西夏文字の音で示したものであるということですから、これさえあれば、西夏文字の音を解明することができそうです。『掌中珠』は未解読文字の解読にとって願ってもない資料ですね。

安井教授：そのとおりです。しかしこれは簡単な語彙集です。全ての西夏文字を網羅しているわけではありません。『掌中珠』以外の対音対訳資料としては、西夏語に訳された仏教経典があります。仏教経典には対応する原典がありますので、両者を対照することにより逐次意味と音を解明していくことができます。しかし『掌中珠』や西夏語訳仏典だけでは限界があります。特に西夏文字の音の解明が難しいようです。

これもまた幸運なことに、西夏文字で書かれた西夏語の発音辞典が数種類発見されました。その中の『同音』という発音辞典はなかなか面白いようです。これは西夏文字によって書かれた西夏語の発音辞典で、同じ音の西夏文字をひとまとめにして提示しています。

佐藤久美：すみません、「同じ音の文字をひとまとめにして提示してある」とはどういうことでしょうか？

安井教授：西夏語は、中国語に似ていまして、一つの文字がちょうど一つの音節として発音されます。ですから、同じ音の文字というのは、同じ音節の文字ということです。それをひとまとめにしているわけです。

佐藤久美：オンセツというのは以前習ったような気がするのですが、どういうことだったのでしょうか？

安井教授：言語学での説明はなかなかヤカマシイのですが、一般的にはこういったことでいいと思います。

一つの「音節」というのは、日本語でいえば、カ (ka) キ (ki) ク (ku) などカタカナの一文字や、キャ (kya) キュ (kyu) キョ (kyo) などの小さな文字を含んだ二文字になります。佐藤さんが習っている中国語の場合、「中国」は中 (zhong) 国 (guo) と発音しますが、zhong や guo が1音節にあたります。一つの母音、この場合 o ですが、それを中心に前後に幾つかの子音や副母音がついたものが1音節です。これは漢字一つの発音に相当します。もっとも、子音や副母音が無くて、母音だけで音節となる場合もあります。

佐藤久美：そうしますと、先生がおっしゃった「同じ音の文字をひとまとめにして提示してある」というのは、同じ音の漢字を一つのグループにまとめるように、同じ音の西夏文字を一つのグループにして並べたということですね。

安井教授：そのとおりです。まず実物を見てみましょう。これは、『同音』の一部分を切り取ったものです。



『俄藏黑水城文献⑦』（上海古籍出版社。1997年）による

いかがでしょうか？

佐藤久美：どの様になっているのか見当もつきません。大きな文字の下に小さな文字があります。これは何でしょうか？

安井教授：小さな文字は、上の大きな文字に付けられた説明です。今のところは無視しておきましょう。

佐藤久美：それから、小さな文字の部分に、丸の印○があります。これは何でしょうか？

安井教授：ここが大事です。

○から○までは、同じ音を持つ文字です。ですから、①から④までは同じ音を持つ文字のグループということになります。じつは正確にいうと異なる場合もあるのですが、今のところ同じ音ということにしておきます。もちろん意味はそれぞれ異なります。

①𐵑(5235)は「吐蕃」という意味。

②𐵒(5650)は「袋」という意味。

③𐵓(2560)は「舎」という意味。

④𐵔(1605)は「獄」という意味。

問題は、この①から④までの具体的な音です。西夏文字自体には、具体的な音を示す情報はありません。これらがどのような音であったかというのは、西夏文字以外の文字を使って音を記した資料に拠るしかありません。このようなものを対音資料といいます。先ほどの『掌中珠』を見てください。『掌中珠』のA2 𐵓は、『同音』の③𐵓と同じ文字です。それで、A2 𐵓に「野」という漢字が振られていますから、当然『同音』の③𐵓も「野」という音を持っていたはずです。さらに①から④までは同じ音ですから、①から④は「野」という音であったということになります。これで対音資料を持たない西夏文字の音もわかってしまいます。もちろん「野」というのは近似音で、西夏語の音そのものではありませんから、いろいろ突き合わせて、おそらくこの様であったであろうと、推定をするわけです。

先ず、『同音』の中にある全ての音のグループを抽出して西夏語の音節を整理し、音節の表を作ります。次に、その音節表と色々な対音資料が示す近似音を見比べながら、合理的な西夏語の音を推定するわけです。推定の材料が同じでも、研究者によって何が合理的かという考え方が異なる場合がありますので、実際には様々な推定音が公表されることになります。

今日はこれくらいにして、また来週集まりましょう。西夏語をどのように解読するか、ということを書いた本に『精選復刻紀伊国屋新書 西夏文字』（西田龍雄著、紀伊国屋書店、1994年）があります。解読の経過が良くわかりますので、目を通しておいてください。

\*\*\*\*\*次回は次のページからです\*\*\*\*\*

### 第3回 《字典の利用》

安井教授：今日は前回紹介した『夏漢字典』（李範文編著、中国社会科学出版社、1997年）を使い、皆さんに西夏文字を調べてもらいましょう。ここに二冊あります。まずは、手にとってみてください。

佐藤久美：なかなか厚くて重い字典ですね。最初と最後にいろんな索引があります。目的の西夏文字の意味と音を知るにはどうしたらいいのでしょうか？

安井教授：後ろの1088ページを開いてください。「夏漢檢字索引」という見出しがあります。この索引が基本です。漢和辞典に部首別索引がありますが、それと同じ作りになっています。

1088 から 1090 ページに部首索引の表があります。まず調べたい西夏文字の部首を特定する必要があります。

佐藤久美：西夏文字の部首を特定するにはどうしたらいいのでしょうか？

安井教授：西夏文字の上の部分または左の部分を部首に見立てています。ちょうど漢字の「かんむり」と「へん」に当たりますね。調べたい文字の「かんむり」と「へん」の部分に着目し、同じ字形のものを部首索引の表の中から見つけ出します。部首を同じくする文字は1091から1166ページにまとめて置いています。ここに目的の文字があるはずです。

① 先ず調べたい西夏文字の部首をみつけ、

② 次に部首毎にまとめられた箇所から目的の文字を探し出す、ということですね。実際にやってみてください。

今日は練習材料として西夏文字が鑄込まれた銅製の牌を用意しました。山村君、オモテの西夏文字の部首は何でしょうか？



オモテ



ウラ

山村健一：「ヘン」に当たるところをみると「𠄎」があります。これが部首だと思えます。5画ですから、部首索引の5画の箇所を探すと、・・・・・・

「𠄎55」

とあります。55という数字は何でしょうか？

安井教授：この数字は、部首「𠄎」を持つ西夏文字があるページ数です。もともと、これは編集上のミスでしょうが、索引用の55というページ数はどこを探してもありません。部首索引の後の1091ページが索引用の1ページにあたり、最後の1166ページが索引用の76ページにあたります。ですから、皆さんは自分で1091ページを1ページとして順にページ数を振ってください。

・・・・・・索引用のページ数を振る・・・・・・

山村健一：55ページは、総ページ数の1145にあたります。そこを見ますと、

𠄎 ·jij 2.37 VIII 2560

安井教授：「·jij」はこの文字の具体的な音で、[イェイ]に近い音とってください。「2.37 VIII」も音に関する情報です。今のところこれらは無視してください。重要なのは「2560」という数字です。ここが一番大事なところですよ。これはページ数ではありません。

この字典には6000字の西夏文字の親字が収められていまして、その文字の一つ一つに0001から6000までの番号が振ってあります。文字の背番号と言ったところですね。この文字の背番号は、本文中の見出し字の真下に付いています。2560番の文字はすぐに見つかるはずですよ。字典を引いてみてください。

山村健一：ありました。総ページ数の485ページにあります。

・・・・・・

- ①見出し字「𠄎」の下に2560とあります。これが文字の背番号ですね。
- ②その右横に、〔喉音 ·jij 2.37 音野〕とあります。
- ③ それから英語で「tent;house」、
- ④ 中国語で「帳、舎、堂、室、宅、廟、泡也。(名)」と意味が書かれていて、
- ⑤ その下に、いろんな資料での用例があります。

ところで、②の〔喉音 ·jij 2.37 音野〕というのはどういう情報でしょうか？

安井教授：先ず「喉音」からいきましょう。前回、西夏文字によって書かれた西夏語の発音字典に『同音』という便利なものがあるとお話ししましたね。この「喉音」や、それから索引のところで出てきた「VIII」という数字は、『同音』からわかる音の情報です。

『同音』は、西夏語の音を分類整理するにあたり、先ず音節の出だしの子音の性質によって九つに大きく分けました。それぞれにどのような子音が対応するかを示すと次のようになります。

『同音』の分類

重唇音一品・・・・・・・・・・	I	p	ph	b	m
軽唇音二品・・・・・・・・・・	II	w			
舌頭音三品・・・・・・・・・・	III	t	th	d	n
舌上音四品・・・・・・・・・・	IV	n			
牙音五品・・・・・・・・・・	V	k	kh	g	ŋ
齒頭音六品・・・・・・・・・・	VI	ts	tsh	dz	s
正齒音七品・・・・・・・・・・	VII	tś	tśh	dź	ś
喉音八品・・・・・・・・・・	VIII	·	y	x	
流風音(来日音)九品・・	IX	l	lh	r	z    ž

山村健一：先生、どうも変です。

『夏漢字典』の最初の部分に「凡例」がありまして、ここに子音の表が掲載されています。ところが、こちらの方は「w」と「g」と「·」の三種が欠けています。これはどうしたことでしょうか？

安井教授：いいことに気づいてくれました。

この字典の編著者は李範文氏ですが、実は、李氏はこの字典の音として、龔煌城氏のローマ字表記法を採用したと、ことわっています。そのローマ字表記法をまとめた表が最初の「凡例」のところに出ています。佐藤さんも開いてみてください。

「声母」と「韻母表」というものがあります。声母というのは、音節の出だしの子音です。それを集めたものが「声母」の見出しの下に出ています。韻母というのは音節の出だしの子音(声母)を除いた部分です。その韻母をまとめて表にしたものが「韻母表」です。「·jij」という表記は、これらの表に拠っています。ここはローマ字で具体的に西夏文字の音を示した重要な部分ですね。

ところが、この「凡例」で示されたローマ字表記法と本文中のローマ字の音注が一致しません。声母については、山村君が指摘したとおりです。韻母についても一致しない部分が相当数あります。本文中のローマ字の音注をそのまま使えばいいではないか、ということかもしれませんが、その音注に問題が有るのか無いのか、それを検証する手だてがありません。音注の根拠がわからないのです。

山村健一：そうしますと、ローマ字による音注の部分は使えないということでしょうか？

安井教授：そのように言うしかありません。しかし、これに代わるものがあります。

佐藤さん、字典の⑤の部分を見てください。いま問題にしている文字

(2560) の⑤の部分です。ここは、いろんな資料の中での用例があるところでしたね。どうなっていますか？

佐藤久美：「𐽄𐽄 jie2.37wi2.7〔野𐽄〕宮室、宅宇（同 42B3）」とあります。

この情報のうち、「jie」が「𐽄𐽄」の音に相当するようです。②は「・jij」ですから、同じローマ字表記といってもずいぶん違いますね。

安井教授：そうですね。「jie」の方は李範文氏自身が推定した音です。

李氏は『同音研究』（寧夏人民出版社、1986年）という本を出版しています。「𐽄𐽄 jie2.37wi2.7〔野𐽄〕宮室、宅宇（同 42B3）」は、そこから抜粋したものです。ですから、字典の「jie」という表記に誤植はないかどうか、また、どのような根拠により「jie」と推定したか、ということについて、原典の『同音研究』で確認することができます。わたしたちはこの部分の音を利用することにしましょう。

ただし困ったことに、『同音研究』をそのまま抜粋したものではないようです。両者の表記を比べると相当に異なる部分があります。引用する場合は、多少面倒でも原典の『同音研究』を調べ、そちらの音を採用しておく方が無難でしょう。

佐藤久美：②の〔喉音・jij 2.37 音野〕のうち、「喉音」の意味はわかりました。「・jij」は利用せずに『同音研究』の「jie」の方を利用すべきだということもわかりました。それから「音野」とありますが、この文字の音を漢字で書けば「野」となるということもわかります。

そうしますと、「2.37」というのは何でしょうか？

安井教授：ここからが少しヤッカイです。こまかい話が続きますが、もう少しで終わりますのでがまんしてください。

西夏語には中国語やチベット語のように声調がありました。その種類は二つです。一つは「平声」と呼ばれる声調でこれを数字の「1」で、いま一つは「上声」と呼ばれる声調で「2」であらわします。

山村健一：「平声」と「上声」はどのような声調の調子だったのでしょうか？

安井教授：よく分かりませんが、「平声」は平らの調子で、「上声」は昇りの調子であったとも言われています。

それで、「平声」という声調の韻母が 97 種、「上声」という声調の韻母が 86 種あったことが分かっています。

山村健一：そうしますと、「2.37」という数字のうち、「2」は声調で、「37」は韻母の番号でしょうか？ 上声という声調で、第 37 番目の韻母、というわけですね？

安井教授：そのとおりです。この番号は、どの研究者も使っていますから、西夏語の音を論ずる際の基準となります。

これで、『夏漢字典』を使って資料を読み解く最低限の準備ができたわけです。それでは、牌のウラにある三字を『夏漢字典』で調べてみましょう。

・・・・・・・・ 作 業 ・・・・・・・・



佐藤さん、作業の結果を黒板に書いてください。

佐藤久美：はい。こういうことでしょうか。

「菝」→部首は四画の冠「𠂔 33」 →4343→「道、典」

「𠂔」→部首は四画の偏「𠂔 38」 →2852→「仏」

「一」→部首は一画の冠「一 1」 →0100→「一」

オモテは「舎、廟」で、ウラは「道、典」「仏」「一」ということですが、これはどういう意味でしょうか？

安井教授：よくわかりません。言葉の情報量の少ないこの手の資料は、文物の文化的な背景を知らないと読み解くのは難しいですね。西夏の専門家でしたらすぐに分かるのかもしれませんが、わたしには歯が立ちません。ここでは、西夏文字の調べ方は分かった、ということで良いという事にしておきましょう。次回はいま少し読みやすい資料を用意します。

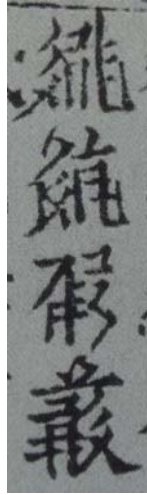
それから、『西夏王国の言語と文化』（西田龍雄著、岩波書店、1997年）という本があります。タイトルのとおり、西夏の言語と文化について様々な角度から書かれています。難しい部分もありますが、読みやすい箇所からでいいですので目を通しておいてください。

それでは今日はこのくらいにしておきましょう。お疲れ様でした。

**\*\*\*\*\*次回は次のページからです\*\*\*\*\***

## 第4回《資料を読む》

安井教授：今日は字典を使って西夏文字で書かれた資料を読んでみましょう。たった四字ですが、これはこれで内容が完結しています。さっそく始めてください。



『俄藏黑水城文献⑩』（上海古籍出版社。1999年）による

・・・・・・・・・・・・・・・・ 作 業 ・・・・・・・・・・・・・・・・

安井教授：佐藤さん。黒板に西夏文字の意味と音を書いてください。

佐藤久美：はい。

「𐽄」	→部首は四画の偏→2098→「我也。（代）」	上声 ɲa
「𐽅」	→部首は六画の偏→5354→「此也。（代）」	上声 di(thi)
「𐽆」	→部首は六画の偏→1045→「言、話、語也。（名）」	上声 nīa
「𐽇」	→部首は三画の冠→5026→「聽、聞也。（動）」	平声 mi

これでよろしいでしょうか？

安井教授：はい、問題はなさそうですね。山村君、これはどのような意味になりますか？

山村健一：おそらく「私は此の言葉を聞いた」という意味だと思います。

ですが、「聞いた」なのか、それとも「聞いている」とすべきなのか、わかりません。それから「私の此の言葉を聞け」かもしれません。西夏語の文法を勉強するにはどうしたらいいのでしょうか？

安井教授：じつは、この一文は『番漢合時掌中珠』から採ったものです。対応する中国

語は「我聞此言」ですから、山村君の訳のとおりです。西夏語の文法は、このような対訳資料とのつき合わせや、西夏語のなかに繰り返し現れる表現の型の分析、それに西夏語に近いと思われる現代の諸言語とのつき合わせなどにより解明されていくのでしょうか。先週紹介した『西夏王国の言語と文化』のなかに文法についての記述があります。なかなか難しいのですが挑戦してみてください。

すこし休憩しましょうか。

．．．．．お茶を飲みながら．．．．．

佐藤久美：これまで、字典の使い方を勉強してきましたが、一字一字の西夏文字がどのような作りになっているか、ということにも興味があります。この方面の勉強をするにはどうしたらいいのでしょうか？

安井教授：前回紹介した『西夏王国の言語と文化』が参考になります。

これによりますと、単一の要素でできている単体字の西夏文字は少数で、ほとんどが幾つかの文字要素を組み合わせた合体字だそうです。それで、その合体字の作り方の中に西夏人の思惟方法を見て取ることができるそうです。

すこしだけ本の内容を紹介すると、こういったことです。たとえば、漢人の「漢」をあらわす西夏文字は𐽄 (5882) です。これは小偏 (𠂇) 𠂇と虫の傍 (𠂇) 𠂇から成っているのだそうです。漢は「小さな虫」だとの西夏文字作者の反感の思いが込められているのであろうとのことでした。

𠂇 (5815) 「小」 + 𠂇 「虫」 → 𐽄 (5882) 「漢」

また、𠂇 (2852) 「𠂇」の偏と傍を逆にすると𠂇 (4440) 「𠂇」となり、𐽄 (2541) 「人」の偏と傍を逆にすると𠂇 (2518) 「心」となります。これは𠂇と(𠂇)𠂇、人と心が密接な関係にあるとする考え方の反映だそうです。

𠂇 (2852) 「𠂇」 — 𠂇 (4440) 「𠂇」

𐽄 (2541) 「人」 — 𠂇 (2518) 「心」

佐藤久美：偏と傍を逆にして関連にある文字を作るというのは、なかなか面白いアイデアですね。そうしますと、先ほどの𐽄 (5882) 「漢」ですが、その偏と傍を逆にするとどうなるのでしょうか？

安井教授：そういった文字があるかどうか知りません。佐藤さん、字典で調べてみてください。

．．．．．

佐藤久美：ありました。3801 番に𠂇がありました。意味は虫のようです。どのような虫

かハッキリしません、とにかく何かの虫を指すようです。

そうしますと、𠂔 (5882) 「漢」という文字は、𠂔 (3801) の偏と傍を逆にして作り出したものかもしれませんね。𠂔 (3801) がどんな虫なのか知りたいところです。

安井教授：なるほど。いずれにしても、西夏国にとって東に位置する漢人の宋国は第一級の文明国であり強国であったことは間違いありません。その漢人の「漢」を見くらすような西夏文字を作り使用したところに、西夏側のなんとも複雑な思いを見て取ることができますね。

これらの例は比較的にわかり易い関係ですが、なかなか連想が困難な、またおもしろい組み合わせもあるようです。文字要素の組み合わせの中に、それを作り上げた人々の考え方が反映するというのは、程度の差こそあれ、どのような文字にも見られることです。文字は文化の結晶というところでしょうか。

それから、『【シルクロードの謎】西夏文字の話』（西田龍雄著。大修館書店。1989年）という本にも文字のことが書いてありますので参考にしてください。

**\*\*\*\*\*これで終わります。お疲れ様でした\*\*\*\*\***

以上は吉池孝一が担当しました